8万基

約8万基の墓石や石仏が並ぶ。小型無人機で上空から撮影すると、モザイク画のようにみえる。役目を終えた墓石の多くは産業廃棄物として破砕処理されるが「砕くのはしのびない」と安置を望む人も多い。三島住職は「墓じまいをしても、先祖供養は続けてほしい」と願う（9月22日、広島県福山市で）

変わる供養 変わらぬ祈り

広島県福山市の山中に、墓石や石仏などが瞬間なく瞰かれている。同市の宗教法人・不動院は2001年から所有地に設けた「墓石安置所」で、墓じまいなどで役割を終えた墓石などを受け入れている。その数は約8万基にのぼる。

墓じまいなどで遺骨を別の場所に移す「改葬」が増えている。厚生労働省によると2000年度は6万6643件で、18年度は11万3884件。三島覚道住職(79)は「高齢化や核家族化が進み、墓守りが難しくなっているのでしょう」と話す。

霊園の運営などを行う「ヤシロ」（大阪府箕面市）には、墓じまいの相談が「年間1000件ぐらい」寄せられるという。内容は「子どもや孫にお墓の負担をかけたくない」「遠方でなかなか墓参りにいけない」などが多い。それらの思いに応えるため、同社は納骨堂の運営も始めた。「堂内墓地」とし、家族専用のカードで遺骨が自動的に参拝室にある「お墓」に収められ、供養できるシステムになっている。

見学希望者は多く、新型コロナウイルスの感染拡大で、今夏からオンラインも使って行う。担当者は「手入れや利便性も考え、生前に申し込む人もいます。コロナ禍もあって、オンラインを使った墓参りや法要を求める声もあり、検討しています。これまでにない先祖供養の形が広がっていくかもしれません」と話す。

9月27日、兵庫県加古川市のパート従業員、北面政子さん(63)は、母親も眠る高松市内の墓地で、業者が先祖代々の墓を撤去するのを見守った。親戚も少なくなり、近年は足が遠のいていた。墓じまいは以前から考えていたが、コロナ禍で移動を控えたい思いもあり、決心した。遺骨は加古川市の納骨堂に移す。「これでいつでも会えるね。近くで見守って」。母親の遺骨を手に取った。

写真と文　菊政哲也

参拝室

「ヤシロ」が運営する「大阪御廟」。参拝室の「お墓」には、写真なども表示される。オンライン見学会では、スマホを使って参拝室などを案内し、サンプル写真などを表示して、システムを説明する。写真はスライドで複数見ることができ、担当者は「思い出の写真も見られます。より故人を身近に感じられ、話が弾むことがあります」（9月28日、大阪市淀川区で）

墓じまい

墓石を撤去する「茨匠」（奈良県橿原市）の社員。「一家族にとって大切な故人様のお墓なので、失礼のないよう一本一本に作業することを心がけています」と伏見貴成さん(30)は話した（9月27日、高松市で）

墓石の一部が撤去されず、32年前に亡くなった親らの遺骨と対面して手を合わせる北面さん。「しばらく来られなくてごめんね。これからは頻繁に会えるよ」と話しかけた

子供の頃、母親に連れられ、毎年、お盆に参っていた北面さんの先祖代々の墓は、約3時間の作業で更地になった。「親戚のイチゴの収穫を手伝った際、いっぱい食べて、笑顔になった母が思い出されます」

代行

コロナ禍では、代行業者に墓参りや手入れを依頼する人も少なくない。神戸市北区の墓地ではタクシー会社第一交通の運転手、川畑勝さん(62)が、移動を控える遠方の家族からの依頼で墓参りを行った。「自分の家の墓参りをするのと同じように心を込めてお参りさせていただいています」（9月7日）＝浜井孝幸撮影

ズームアップ

毎週月曜日掲載

※レイアウト　小野圭二郎

読売新聞オンラインのズームアップは
https://www.yomiuri.co.jp/photograph/zoomup/